



ニッポン  
ドクター和の

# 臨終図巻

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。大阪大第1病棟、長尾クリニックを開業。外来診療か「人を診る」総合診療を目指す。近著「菓のやめどき」は「痛くない死に方」は「いずれもベストセラー」。関西国際大学客員教授。

天国の樹木希林さんは、最愛の夫との再会に、「遅かったわね」と言うのでしょうか。それとも、「あら、意外に早かったじゃないの」と笑うのでしょうか。

ロック歌手で映画俳優の内田裕也さんが、17日に都内の病院で亡くなりました。享年79。死因は、肺炎とのこと。

妻の死から半年後の夫の旅立ち…朝丘雪路、津川雅彦ご夫妻もそうでした。妻に先立たれた男性というのは、目に見えて弱くなる。

在宅医療の現場においても、生前、妻に悪態をつきまくっていた傲慢な夫ほど、妻の死を境にみるみる元気がなくなってい

## 98ロック歌手、映画俳優内田裕也

「死にたい」と繰り返し、セルフネグレクトのような状態に堕ちゆく人も少なくありません。アメリカのある調査によれば、妻を亡くした男性は、平均よりも30%ほど早死にする可能性が高くなるとか。女性においてはそんなデータはないようですが。

しかし、裕也さんの場合はそれだけではなかったように思います。昨年夏に、崔洋一監督による裕也さんを300時間取材して完成したドキュメンタリー番組を拝見しました。ナレーションは希林さんが務め、最後の共演



を果たしました。

その番組を見たとき、「これは、希林さんよりも先に逝ってしまうのでは」と感じるほど、裕也さんは弱っておられた。長年、心身ともに無茶をしてきた人が、骨折や脱水という「若い」の経過が人より少し早めに表れて、徐々に枯れていくお姿でした。

今思うのは、裕也さんの中に「希林は絶対に見送ってやる」という、今まで妻に迷惑をかけたばなしだったからこそその夫の意地、いえ、優しさがあったのではと感じました。希林さんの納骨時には、別居中の御自宅に顎の骨を持ち帰ったといひます。

波乱と矛盾に満ちた夫婦の半生、と誰かが語っていました。が、男と女なんて死ぬまで波乱と矛盾に満ちているから面白いのです。希林さんも、面白がっていたでしょう。

報道によれば、今年の1月中旬旬から裕也さんは発熱をし、誤嚥性肺炎の治療を在宅で行っていたようです。しかし2月20日に救急車で病院に搬送されま

す。

ただしその後も、娘の也哉子さんの希望もあって、胃ろうなどの選択をせず、「最期まで口から食べることにこだわりました。ハンバーグ、ステーキ、寿司…好きなものを少しずつ、ローテーションで食べさせたとか。亡くなる前日も大好物のオムライスを召し上がったそうです。素晴らしい。もしかしたら希林さんが生前、暗に指示していたのかもしれない。

最期まで好きなものを食べ、好きなことを言う―究極のロックンロール人生ではないでしょうか。

# 最期まで好きなものを食べ究極のロックンロール人生